

「第2回大谷観光推進基本計画策定懇談会」議事録

1 日時・場所

平成16年2月13日(金) 午前10時から正午
宇都宮市庁舎 9A会議室

2 出席者

【委員】

・森本章倫, 小野口順久, 阿部英夫, 池田克雄,
鈴木成昭, 竹澤奈穂美, 中根 裕, 林 香君,

【オブザーバー】

・清水隆文(宇都宮大学助教授/岩盤工学)

【市職員】

・商工部次長, 商業観光課長, 観光コンベンション協会事務局長, 事務局職員

3 議事

- (1) 大谷観光推進の基本方針について
- (2) 大谷観光推進の主要事業について
- (3) 今後の大谷観光開発の進め方について
- (4) その他/地下空間の安全性評価について

4 会議経過

- (1) 開 会
- (2) あいさつ(森本会長)
- (3) 報 告
 - ・第1回懇談会議事録のついて
- (4) 協 議
 - ・下記に要旨を記載
- (5) 閉 会

5 傍聴者

なし

6 主な意見, 質問等(要旨)

- (1) 大谷観光推進の基本方針について

事務局

【資料説明】

大谷観光推進の方向性等について提案

- 委 員** 【協議経過】
「大谷」というのは、全国ブランドだ。これをどう活かしていくかを考える必要がある。
安全性と商品力を磨き、観光の拠点とし、客を呼び込めるブランドだ。
そうした視点から見たときに、産業等との連携を入れた大谷観光の方向性は評価するが、未だに大谷地域限定のゾーニング図がでてくるのはいかなるものか。
- 座 長** ゾーニングについては、今後計画地区内の開発等をいい方向に誘導するための基本となる考えである。
乱開発を防ぐためには、エリア毎の性格付けを行い空間的な配置図を示す視点も必要である。
- 委 員** そういった視点から必要ということなら了解した。
グリーンツーリズムの関連で、都市型の農家を振興していくような補助制度があったと思うが、こうしたものの活用はできないか
- 委 員** 確かに規制のための法律ばかりではなく、そうしたプラス志向の法律があるのであれば、そうしたものもピックアップしたほうがよい。
- 委 員** 宇都宮大学の藤本教授がまとめたレポートによれば、問題の所在として
- ・ プロジェクトの主体がはっきりしない。
 - ・ 地域住民が共有していない。
 - ・ 連携がない。
 - ・ もてなしに欠けている。
- などが挙げられている。
- 委 員** 旧大谷公会堂の移築についてもきちんと提言に盛り込みたい。
多気山御殿平の整備についても、過去に要望がでていますが具体的に進んでおらず、タイムスケジュールを示してほしい。
- 委 員** 計画を具体化させていくためには、地元にいる一人ひとりの人間同士をつなぎ、気持ちを掘り起こしていくことが必要。
大谷観光の方向性については、よくできていると思う。
- 委 員** 大谷の住人は、大谷石産業に従事する労働者が主体。今は子どもは外に出てしまい、老人が残っている。この人たちに大谷をどうするんだといってもなかなか難しい。
提案している人たちに大谷に来てもらって実際にやってもらうことで住

民性も変わってくるのではないか。

レストランができた，芸術家がやってくる。こうした外からの刺激が変わるきっかけに必要なだ。

委員 中心市街地についても同じことがいえる。どんどん商店が歯抜けになっていく。労働者というその言葉は大切だ。主役は誰なのか。そこに住んでいる人が主役だという考えは必要だ。

委員 中心市街地の活性化を目指す「バンバコミッション」が立ち上がった。
「バンバ」は宇都宮のブランドであり，その下にできることからとにかくやってみよう，まちの歳時記は自ら作るつもりでやっている。
「大谷」というブランドのフラッグシップの下に歴史と未来をどう盛り込んでいくのか。これが観光の出発だ。
「大谷」と「バンバ」，この2つのコラボレーションが宇都宮の都市観光の原点だ。

委員 都心部と大谷が連動した都市観光をぜひ形成してほしい。
今，大谷に必要なのは，労働者が自分の技術を見せられる場だと思う。技術を持っているプライドを確認できる場，技術を伝承する場が必要だ。
そういう場のつなぎをするのが，今回の懇談会の肝になるのではないかな。
アシストする行政の機能が重要だ。

委員 懇談会に先立ち大谷を一巡りしてきた感想を述べたい。
素材としての大谷資料館のスケール，奇岩景勝は素晴らしいが，第一の感想としては，面としての大谷集落の石の集積が素晴らしい。
生活の場のちょっとした蔵とか，面としてさすがに残っているなあと感じた。この独特の景観は他にはない。
地区全体の景観規制なのか，新たな作り込みなのかは今後の議論として，これだけのものが残っている今，この状態でなんとかしないとならない。
新たな景観への取り組みをすぐに始める必要がある。

このために一番大切なのは，住んでいる方が誇りを持っているかだ。
一般の人も，農家をやっている人も，観光業の人も含めてこうした自覚が必要である。

委員 産業遺産が今，観光資源として注目されている。小樽なども煉瓦造りの倉庫に人がどんどんやってくる。
産業観光というのは，そのものの姿を見てもらうこととともに，その産業を軸に発生した生活とか文化を実際に体験してみて，感慨を受けたりするこ

とが大切だ。

労働者の方は、大谷石のような独特な産業に従事していても、その方にとっては生活の糧であり、当たり前のものであるかと思っているかもしれない。だが、他の人から見ると価値をもっているものだということを自覚することが必要だ。そうしないと根付かない。

我々の産業が日本の文化の一つを支えているのだという意識付けが必要だ。そうしないと上すべりしてしまう。

委員

行政主導で一番欠落するのはマーケティングの視点。

誰にどういう魅力を伝えるのか、そういうことをイメージしないといけない。大谷も古賀志も一緒に同じ人が体験するものではない。同じ人でも場面が違って来る。外からお客様を呼び込むためにはお客様の客層をイメージすることが必要だ。

考えられる客層としては、東京圏、日光・鬼怒川周遊客、地元の3つがあると思う。

- ・東京圏からみて宇都宮は週末圏であり、そんなに計画をしっかりと立てなくても軽い気持ちで来れるエリアである。
- ・日光、鬼怒川などの周遊客の立ち寄り観光も狙える客層である。
- ・地元については、市民、県民が圏域の中で行き来する雰囲気が必要。

特に都市観光との組み合わせがすごく大切。大谷に行って、まちなかでブラブラして、餃子を買ってというルートはコントラストもはっきりしていて可能性がある。

(2) 大谷観光の推進事業について

委員

観光を意識している大谷の住民は少ない。観光地に来てそこだけ見て帰ってしまうのではなく、大谷のまちなかを観光客が歩くようになれば、洗濯物に気をつけようとか、あいさつをしようとか変わってくるのではないか。

観光事業も、住民と一緒に意識を高めるような仕組みが必要だ。

委員

フェスタ in 大谷のワークショップに、帝国ホテルの建設に関わった石工さんのお孫さんが手伝ってくれた。モノを作る人間は、作らないと元気にならない。旧帝国ホテルの石を刻んだ技術者がまだいるかわからないが、残していく工夫が必要だ。

観光客に大谷石の作品と一緒に作ってもらうような仕組みができないだろうか。協同作業で、大谷にもう一度何かつくれないだろうか。

委員

ズバリ、何か行動しませんかという提案をしたい。

今、一番大谷を見せたいのは子どもたち。例えば、仮面ライダーの撮影を大谷でやっているわけだけど、「特撮の里」のような形でバーンと売り出してはどうだろうか。

子どもだけではなく、親子で楽しめるし、人がやってくれば地元も変わってくるはず。ワクワクしたおもしろさが観光には必要だ。

先ほどのみんなで作品を作り上げていくようなじっくりと積み上げていく事業と、わっと起爆剤となるような事業と分けて検討する必要がある。

委員

いろいろな事業があるが、目に見えることをやらないとダメだ。

旧大谷公会堂の移築にあたっては、スキルの高い職人の活用が必要だ。20世紀で大谷石の量的な時代は終わった。21世紀は質への転換が必要。

以前、迷路をやったがものすごく人が来た。

パッとやる手法も必要だろう。

座長

ここに挙げられている事業全部はやりきれない。

この中で一つでもいいからやれる計画を作ることが大切。

時間の流れの中でどういう順番でやっていくのか検討が必要だ。

(3) 地下空間の安全対策について

座長

ここで、今後の大谷観光開発の進め方に入る前に、整理しておくべき課題として、安全対策の考え方について、オブザーバーとして出席いただいている清木先生のご意見をいただきたいと思います。

清木先生

大谷の安全を考える上で、地域全体の視点と、個別案件毎の視点と2つに分けて考える必要がある。

全体の視点からは、平成13年度に県の評価が公表されているが、あまり活用されていない。この評価を受け入れるのか否か整理が必要だ。

個別案件毎の視点で見たときには、まず最初に、その場所が必要な場所であるのか否かを判断する必要がある。

使うということになれば、安全なのか否かを評価する。安全であればそのまま使えるし、安全でないのなら、コストをかけてでも補強すればよい。

用途に応じて安全評価の基準を作る必要がある。また、大谷石は粘り気があるので、40～50年経つと変形することがある。長期的なモニタリングが必要である。

使うという意志決定があれば、それに応じた対処がある。

- 座長** 安全に対する考え方をどうするのかを、計画に盛り込む必要がある。
- 委員** 県の評価については、地元ではあまり受け入れていない。
例えば資料館などは、上に穴があいていることで評価が低くなっているが、地元ではそんなことは思っていない。
一般の人は鵜呑みにしてしまう恐れがあり、それでいいのだろうか。
- 委員** 県ではあくまで相対評価だといっているが、地元では絶対評価がほしい。
昔、危険視と言われる人たちがいた。体験的にわかることができる人たちを巻きこんで絶対評価的なものがほしい。
- 委員** さっきまで議論していたことは何だったのかという気がしてくる。
行政がやるべきことをやっていないということではないか。
安全ではないところに人を呼んでどうするのか。
- 座長** だからこそ、清木先生に来ていただいている。
安全評価のための基準、指針を作りましょう。見えないところでやるのではなく、オープンにして出直ししようとしている。
- 委員** 地元の人も入れた安全評価の仕組みを作ることが必要だ。
- 委員** どこもかしこも安全だというわけにはいかないから、今の段階でエリアを分けることが必要。危険だとされたところは、こうして安全にしていくという手法を示せばよい。
ポイントを絞って徹底的に安全にしていくべきだ。
- 委員** まずは、公共の道路、施設がステップ1だろう。
- 座長** 安全性については全員の責任である。
行政だ、業者だ、住民だといった話しではなくなっている。
行政は公共性の高いところに責任をもち、民間はアイデアを活かして、事業性を確保できるならお金をかけて開発すればよい。
しかし、勝手にやられては困る。その判断をする仕組みを作る必要がある。
全体の話しと個別の話しを分けてやる必要がある。安全性の評価をぜひ盛りこんでいきたい。
- 委員** 賛成だ。今までなぜ事業が進まなかったのか。危険だというイメージがあったからではないか。ポイントを絞り完全にしていく。情報はオープンにしていくことが大切だ。

委員 住民の意識は、誰かがやるんだらうというものだ。
石を掘り出し、最盛期にはわが世の春を謳歌していた石材業者へのわだかまりはある。なかなかそうした感情を逆なでしないようにするのは難しいがこうした思いへの配慮は必要だ。

委員 また、奇岩景勝の並ぶ川沿いや、資料館の入口の景観等についても、大きな観光という視点からのお骨折りをいただきたい。

(4) 今後の大谷観光の進め方

委員 行政、民間、そして共同でやることの区分をきっちりすることが必要だ。

委員 計画を詰めていくにあたっては、手応えがないとみんな元気がなくなってしまう。実現できるもの、地元が参加できるものに配慮したらよい。

委員 行政にお願いしたいことは、行政機関内部の調整。あちこちの窓口を渡り歩かないと一つの事業ができないというのはつらい。それをやってもらえるだけでも事業の実現性は高まる。

委員 住民の創意がないとなかなか事業をすすめられないといったこともあるが、こうした時は「この指止まれ」方式でやっていくと有効である。

座長 そろそろ、時間となったので第 1 回目の懇談会は終了とします。

事務局 次回日程は、3 月 2 日、午前 10 時とします。

以上の協議を踏まえ、第 2 回懇談会は終了した。